

中学校英語科における小中連携の試み

ー学びの連続性に着目してー

齋藤 公意 (22017)

1. はじめに

令和2年度より小学校における外国語教育が全面実施となり、小中連携が喫緊の課題である。しかし、文部科学省の令和4年度「英語教育実施状況調査」概要によると、小中連携の取組は十分であるとは言えない。例えば、宮城県内の公立中学校130校中「小学校との連携に取り組んでいる中学校」は69.2%であった。「中学校と小学校との連携の形態」別にみると、「情報交換」を実施しているのは60.8%、「交流」を実施しているのは38.5%、「小中連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定」を実施しているのは11.5%、「その他の取組」を実施しているのは6.2%であった。小中連携を円滑に進めるためには、小学校と中学校の学習内容を互いに把握（情報交換）したり、小学校と中学校の言語材料を比較し、系統的な学びを検討したりする必要がある¹⁾。

2. 研究の目的

本研究では、情報交換、交流、連携カリキュラムの作成を通して、中学校英語科における小学校外国語教育の学びを生かした授業を試行し、検証する。

3. 研究方法

本研究の目的を達成するために、情報交換、連携カリキュラムの作成、生徒の実態を踏まえた小学校の学びを生かした授業実践、アンケート調査を行った。

情報交換は、令和4年7月と令和5年7月、11月に筆者が勤務している中学校区の小学校を訪問し、小学6年生の外国語授業参観、小学校の外国語専科教員1名と指導法、児童・生徒についての情報共有、交流についての打合せを目的として対面で行った。

授業実践は、筆者が勤務している宮城県内の中学1年生30名を対象に、令和5年4月から12月の期間に継続して行った。

アンケート調査は、授業実践と同様の生徒に対し、令和5年4月、7月、12月に実施した。調査の内容は、

平成31年度全国学力・学習状況調査生徒質問紙と先行研究²⁾を参考に作成した。選択肢は、4件法を用い、自由記述の設問も設定した。選択肢の分析は、「当てはまる」を4点、「どちらかといえば、当てはまる」を3点、「どちらかといえば、当てはまらない」を2点、「当てはまらない」を1点として計算し、平均値を算出した。

4. 研究の成果と考察

4.1 情報交換

情報交換の成果は以下の3点にまとめられる。

1点目は、小学校外国語科の指導の流れや教師対児童、児童対児童のやり取りの様子等の実態を把握できた点である。言語活動の場面設定や実施形態、ワークシートの活用等は指導法の連携において参考になる。

2点目は、令和4年度より情報交換を実施していることで、交流活動の提案がしやすくなった点である。令和5年度には、「成長した自分を小学校の先生に知ってもらおう」というテーマで、中学生が自己紹介ポスターを英語で作成し、小学校に送った。小学校の専科教員からは、生徒一人一人が自己紹介文の後に付けた質問に対してコメントをいただいた。生徒の感想から、「書くこと」の目的・場面・状況の設定が効果的だったことが分かった。また、小学6年生のUnit8 My Future, My Dreamの単元で、中学生から小学生向けに中学校生活を英語で紹介する活動も設定している。授業で学習したことを活用し、外部とつながる場づくりは、事前の情報交換が重要である。

3点目は、小中の教員がそれぞれ抱えている指導に関する悩みを共有できた点である。専科教員は、小学校の外国語の授業で複数形や三人称単数現在形などの文法指導を明示的に行わない点にもどかしさを感じていた。中学校教員からは、小学校での「書き写すこと」がペーパーテストでどのように出題されているのか、パフォーマンス課題と評価について状況を尋ねた。対話により、教員の悩みがすべて解消するわけではないが、

児童・生徒と向き合う際に共通の認識で対応できるという点で情報交換は意義がある。

4.2 連携カリキュラムの作成

言語材料の連携について、小学校と中学校の言語材料を比較し、学習内容の継続性が図られるよう、小学校外国語科と関わる指導単元を中学校英語の年間指導計画に反映させた。年間計画に明示することで、今後中学 1 年生を担当する教員が活用することも期待できる。また、小学校高学年と中学校 3 年間を通した CAN-DO リスト形式の学習到達目標を作成した。このことは、パフォーマンス課題を系統的・発展的に生かすための材料となり、「目標の一貫性」を図った。加えて、生徒と共有することで生徒自身も目標を把握しやすく、学習に対する自主的な態度や意欲の向上につながった。毎学期の始めと終わり、パフォーマンステスト前に目標を確認する時間を設け、意識させた。12 月に実施したアンケートでは、「CAN-DO リストの目標を意識して学習に取り組んだか」との問いに 85.7%の生徒が「当てはまる」、または「どちらかといえば、当てはまる」と回答した。

4.3 言語材料の連携による授業実践

中学校の英語学習に対する不安を軽減するために、小学校での学びが繋がっていると確認できるよう、授業の導入段階で小学校での既習事項やチャンツを扱った。生徒からは「ああ、やった、やった。」「あれね。」という声が聞かれ、聞いたことのある表現やリズムに触れることで緊張がほどけ、リラックスした雰囲気の中で授業を開始することができたように感じられた。

令和 5 年 12 月に、「Let's Talk 3 道案内-質問する・説明する-」の単元で、「ALT に町を案内する」というねらいの授業を行った。導入場面では、『NEW HORIZON Elementary English Course 5』Unit5 Where is the Post Office?の Let's Chant ②Turn Right.を流し、小学校で学んだ道案内のフレーズが想起できるようにした。一段落目は聞き、二段落目は音声と一緒に口ずさむように指示した。このチャンツを中学校で扱うのは 2 回目であり、生徒の不安を取り除くことで、発声への抵抗が薄らいだように感じられた。また、小学校の教科書にあるマップのイラストを用いて、道順をなぞるリスニング活動を行い、場所のたずね方と何ブロック進むのか、どの建物のそばにあるのかという表現を意

識させた。12 月に実施したアンケートの「チャンツで小学校の学習を思い出すことができた」の問いには、93.4%の生徒が好意的に回答したことから、チャンツの活用は既習表現を想起するのに有効だったと推察できる。しかし、小学校ですべての Let's Sing, Let's Chant を扱っているわけではないため、この点についても専科教員との情報交換を深めることが活動の幅を広げることにつながる。

展開の場面では、ALT の動画を見て、どこに案内してほしいのかを把握した後、町の観光マップを見ながらペアで ALT 役と案内役に分かれて言語活動を行った。前半は、小学校で学んだ表現を用いてペア活動を行い、その後、中間にテキストを用いて新しい表現を全体で確認した。黒板には、小学校で学んだ表現と中学校で学習する表現を視覚的に確認できるように区別して提示した。後半は、道案内のやり取りを新出表現も用いながら再度同じペアで行った。授業後の生徒の振り返りには、できたこと、分かったこととして、「道案内の小学校と中学校の違い。」「小学校で習った道案内の仕方以外の道案内の仕方が分かりました。」「小学校の left とか right, turn の単語など今日の授業で復習できたし、道案内のたずね方や答え方を改めてできた。」などと書かれており、小学校とのつながりを感じながら新たな表現を学んだ様子がうかがえた。

4.4 活動の連携による授業実践

令和 4 年度の調査で「友達と英語を使ってやり取りすることが楽しい」という回答が上位に上がった点から、小学校の指導と同様に、帯活動の中に音声中心の友達と英語で「やり取り」する活動を継続して取り入れた。（表 1）

表 1 導入期で扱った Small Talk のテーマ

	テーマ
Unit0	好きなものをたずね合う What food / color / sport do you like? - I like
	入りたい部活動について伝え合う What club do you want to join? - I want to join
	What do you want to enjoy (in Shizugawa)? - I want to enjoy
	What did you enjoy (in Shizugawa)? - I enjoyed

特に、4 月の導入時期には、「自己紹介」、「好きなものをたずね合う」、「入りたい部活動について話す」という「やり取り」を複数回行った。入学後に、「入りたい部活動」をテーマに「I want to join ○○.」の表現を扱い、4 月末の宿泊研修に合わせて、「宿泊研修で楽しみたい

こと」をテーマに“I want to enjoy ○○.”という生徒同士の「やり取り」も行った。“want to”は小学5年生で学習しており、入学後も繰り返し使用した表現であったこと、話題がタイムリーであったことから、生徒の話す声も普段より大きくなった。また、宿泊研修で行われる活動を簡単な英語で提示したことで、使い慣れたフレーズと活動の英語を組み合わせることで相手に伝えることができ、生徒の負担が少なかったと考えられる。

4.5 教材・教具の連携

小学校で使用している Picture Dictionary を中学校の授業でも継続して使用した。Picture Dictionary とは、英単語と絵が書かれている辞書で小学5年生から使用している教材である。小学校側で卒業前に回収していただき、年度末に行われる、小中引継ぎ会の際に、引継ぎ資料として持参していただいた。

授業中の生徒の様子を観察すると、特に1学期は書く時だけでなく話す時にも Picture Dictionary を片手に会話する生徒も見られ、使い慣れたものを使用する安心感や困ったときのよりどころになっていると感じられた。12月のアンケートで、「ピクチャーディクショナリーは中学校でも役に立ったか」とたずねたところ、30人中29人が肯定的に回答したことから、分からないことを知るための術として、生徒の身近なツールであったことが読み取れた。(図1)



図1 ピクチャーディクショナリーの有用性

4.6 アンケート調査

アンケート調査の結果は以下の3点にまとめられる。

1点目は、英語学習に対する好意と楽しさに関する質問に、12月時点でも9割の生徒が肯定的に回答している点である(図2)。

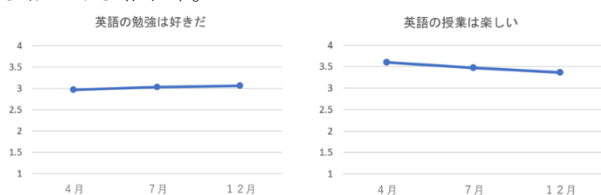


図2 英語学習に対する意識の変容

楽しい理由を自由記述で尋ねたところ、「人と英語で

話すのが楽しいから。」や「友達と受け答えできるように単語を確認しながら会話するから。」等、話すことやコミュニケーションに関する理由を10名の生徒が挙げた。小学校からの継続した「やり取り」を意識した帯活動や言語活動を積極的に授業に取り入れたことが理由だと推測される。次いで、タブレットを活用したゲームに関すること(8名)、授業を通して成長や達成感を感じるから(4名)との回答が続いた。ICTの活用により生徒全員が授業に参加できる環境となり、興味・関心が高まったこと、学習を通して知識や経験が増えたことの満足感が楽しさにつながったと推察される。

2点目は、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」、「単語の習得」、「文法理解」についての「不安の有無」を調査したところ、不安が高まったものと変容があまり見られなかったものに分かれた点である。(図3)

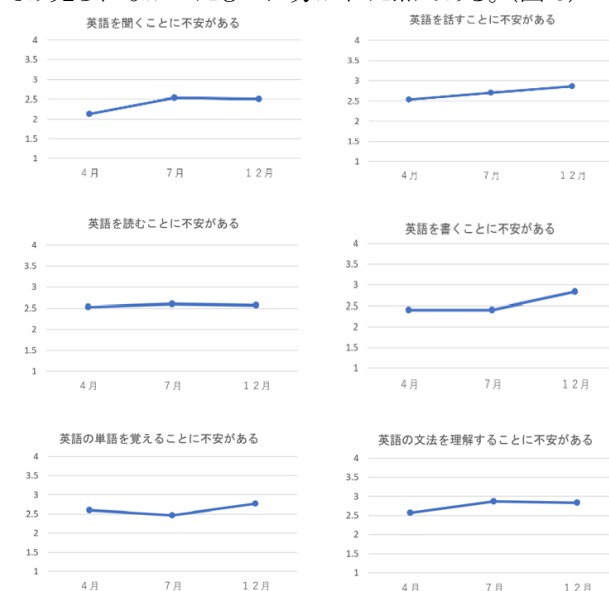


図3 生徒が感じる不安の変容

授業観察や生徒の振り返りの記述から、小学校の学びを生かすことが効果的かどうかは分かったが、技能別の不安軽減には好転しなかったことが分かった。要因として、2学期以降の特徴であるテキストの量や文法事項に関する学習量が増加したこと、さらに受動的な活動に比べて、「話すこと」や「書くこと」などのアウトプットする活動により苦手だと感じる生徒が増えたためと考えられる。

学習者個人の不安をより詳しく考察するために、各項目で「当てはまる」と回答した生徒を対象に、インタビューを実施した。

「話すこと」に関する不安を感じる場面として、「パフォーマンステストでの発音や言い方が分からない。」という

緊張を伴う場面に関すること、「授業で友達と話す時。」と一対一によるその場でのやり取りに関する回答を得た。準備がないと対応できないことや、正確な英文で話そうとしてしまい言葉につまる、言いたいことの単語が出てこないなどの語彙不足が影響していると考えられる。即興でのやり取りを継続して行うことと、簡単な言い方に直すこと、語彙を増やすなどの対応が重要となる。

「書くこと」と「単語を覚えること」に関しては、「つづりが分からない。」との意見が主だった。小学校で学んだ単語が「話すこと」や「読むこと」に役に立っていると 30 人中 19 人が回答したものの、「書くこと」にはうまく移行できていないことがうかがえる。原因として、発音とつづりが一致していないことが考えられる。また、試験を受ける回数を重ね、調べることができない状況での不安が高まったのではないかと考えられる。今後は、音と文字に関する指導やキーセンテンス、パターンプラクティス等の書き写す活動、場合によってはなぞり書き等、段階を踏んで「書くこと」に慣れさせることが大切である。

「文法理解」に関しては、「英文を作る時の語順が分からない。」という意見があった。文法として独立して指導するのではなく、言語活動を通して聞いたり、話したりしながら文法構造に慣れた後に明示的な指導をすることで理解を助け、負担を軽減する手立てになるのではないかと考える。日本語と英語の語順を対比させ、英文を正しく書けるように指導していくことが必要である³⁾。

3 点目は、「聞くこと」と「読むこと」に関して、4 月から 12 月にかけて、不安の値には大きな変化が見られない点である。「聞くこと」に関しては、継続して教室英語を使用したことによる順応と、一言一句聞き取るのではなく、概要や要点を捉えることが徹底できてきたためと考えられる。「読むこと」に関しては、学習者用デジタル教科書を活用し、個人のペースで読む時間を設けたことにより、自信を持って音読できるようになったためと推測される。

アンケート調査から、不安を抱く生徒はいるものの、図 2 で示されたように英語学習に対する意欲や興味は維持されていることから、不安軽減の糸口として、不安を感じる場面においても意欲的に自ら調整を図ることができる力を高めることが重要であると考えられる。そのためには、インタビューの「友達に教えてもらってわかるようになったこともある」という回答からも推察できるように、学

習者同士の協働的な学びを授業内に取り入れることで、不安の低減につなげたい⁴⁾。

5. まとめ

今後もよりよい小中連携を推進するための重要な点として、以下の 3 点を挙げてまとめたい。

1 点目は、教員の異動に関わらず、継続して小中連携を実施するためには、情報交換、交流を年間計画に位置付ける必要がある。学校間の連携は、相互の協力がなくては成り立たず、容易に実施できるものではない。そのため、計画的に機会を設定することが重要である。情報交換をすることによって、アイディアを共有し、ねらいと実態に即した交流活動が可能となる。

2 点目は、言語材料と教材・教具の連携である。この連携により、生徒が感じる小学校と中学校のギャップを埋めることが可能となる。年間指導計画と CAN・DO リスト形式の学習到達目標の作成にとどまらず、より多くの単元、場面で、小学校の学びを生かすことができるよう、情報交換の際の検討が大切である。

3 点目は、活動の連携である。導入期には「聞くこと」、「話すこと」の活動を多く取り入れることにより、生徒が安心して学べる環境を提供することが重要となる。「読むこと」、「書くこと」の活動は、生徒が「聞くこと」、「話すこと」を通して慣れた音声言語に関連させて、丁寧で段階的な授業を展開することで生徒の不安軽減につながるものと考えられる。

引用文献

- 1) 中村香他(2021)「小中英語教育における連携カリキュラムの開発」『東京学芸大学附属学校研究紀要』48 巻, 31-48
- 2) 天野圭吾他(2022)「小中連携を通した主体的に英語を学ぶ子どもの育成」『島根大学教育臨床総合研究』21 号, 139-153
- 3) 萬谷隆一他(2011)『小中連携 Q&A と実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ 40 のヒント』開隆堂, 74-75
- 4) 藤井聡美(2020)「英語学習者が抱える授業内言語不安の解消に向けて: 混合研究を通した考察」『JACET 北海道支部紀要』16 号, 57-81

中学校英語科における小中連携の試み ー学びの連続性に着目してー

齋藤 公意 (22017)

要旨 令和 2 年度より小学校における外国語教育が全面実施となり、小中連携が喫緊の課題である。本実践研究では、情報交換、交流、連携カリキュラムの作成を通して、中学校英語科における小学校外国語教育の学びを生かした授業を試行し、検証した。検証結果は以下の 3 点にまとめられる。第一に、外国語専科教員との情報交換、連携カリキュラムの作成、専科教員と生徒の交流を通して、学びの連続性に着目した系統的な授業を展開することができた。第二に、「聞くこと」と、「話すこと」を多く取り入れた活動の連携は、生徒の英語学習に対する好意や楽しさに好影響を与えた。第三に、既習事項を取り入れた指導が、各技能における生徒の不安軽減には必ずしもつながらなかった。本実践研究論文では、これらの結果を考察し、小中連携を推進していくための要点を整理している。

キーワード: 情報交換, 言語材料の連携, 活動の連携, 教材・教具の連携

ユニット指導教員 (◎ユニット長)

◎鈴木渉, 本田伊克, 齋藤千映美, 金田裕子, 吉村敏之, 越中康治, 仲谷健太郎, 戸塚将